**稽古と無心　－世阿弥を中心に、鈴木大拙の無心理解を経由して、ケアの問題へ**

身心変容技法研究会　2014、6，26、　　　　　　京都大学教育学研究科　西平　直

Ⅰ、用心　－用心している限り名人ではない

1、〈意識する必要〉と〈意識に囚われる危険〉－稽古における「意識」の問題

　　（沢庵禅師）「一所に心を止める」、「心を取られる」　⇔　「心をどこにも置かぬ」

2、「用心の危みもなく」。思いのまま演じる。是も非もすばらしい。（無心の舞）

3、では用心は不要か。始めから無心を求めるべきか。否、稽古は用心の積み重ねである。

「用心」＝「意識する」＝「意識の対象にする」。「主」「客」の分離。　その必要と危険。

Ⅱ、「似する」「似せぬ」「似得る」－大まかな全体枠組み

1、「似する」：意図的な技巧、作為的な工夫、細部にわたる用心　⇒　後述

2、「似せぬ」：似せようとしない。作意・意図・技巧の放棄。しかし放棄が目的ではない。

1）似する必要がない。「物まねに似せぬ位あるべし。物まねを究めて、そのものに真に成り入りぬれば、似せんと思ふ心なし」『風姿花伝』「第七別紙口伝」58。

2）習いたくても習うことができない（伝達不可能）。「習道とはこれまでなり。この上は不伝の曲分なり」『五音曲条々』203。

3）「似せぬ」の困難。「似せぬ」と思っても「似する」が残ってしまう。

3、「似得る」：内側から、おのずから、生じる（「現成」、「到来」、内的必然）。

・無心を求めていると、「似得る」が、不意に（意図せずに）、生じてくる。

・然るべき経過をたどった後に、一定の結果に落ちつく「落居」。

・作為によっては生じない。しかし「わざ」に支えられている。

・その時その場に最もふさわしく響き合う身体（即興性を可能にする身体）。

・「飛鳥の風にしたがふよそおひ（もはや羽ばたくのをやめて、風に乗って漂う姿）」『花鏡』88

　　　　　　　似する　　　　　　　　　　　　　　　　　　似得る

**序／　　　　　　　破　＼　　　　　　　　　急　／**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　似せぬ

Ⅲ、「似する」に向かうベクトルの諸問題

1）順序の強調（次第梯登）「至りたる上手の能をば、師によく習ひては似すべし。習はでは似すべからず『花鏡』93。　⇒「習う」と「似する」の区別

2）「」（子どもの身体こそ理想的。独立した価値）。それを「わざ」のうちに「残せ」。

　⇒「児姿」を「初心者の身体」と読み替えてよいか。

3）型の問題（世阿弥自身は「型」という文字を使わない。「」という）

⇒型は子どもの内側からは出てこない。自然発生的に生じてこない。

⇒型が身に付いていないと、内側から沸き起こるエネルギーを支えることができない。

4）「器（うつわもの）」『遊楽習道風見』163　　器の上に芸を盛る。（基礎・基本・土台）

⇒芸を身につけた後では、この「器」を広げることはできないか。

5）稽古開始以前の子どもの身体（稽古が開始される時点であらかじめ存在していた初期条件）。

「①この芸において、おほかた七歳をもて初めとす。②この頃の能の稽古、かならずその者自然とし出だすこと（子どもが自然にやり始めること）に得たる風体（得意な動き）あるべし。③・・ふと、し出ださん懸りをうち任せて心のままにせさすべし。④さのみに、よき・あしきとは教ふべからず」。『風姿花伝』15

⇒「下地」がある子どもの場合のみ。「下地」がない初心者には通用しないか。

⇒型は既存の下地を生かす。ではその下地が育っていない場合、型は下地を育てるのか。

Ⅳ、「離見の見」（「無心の舞」の内側、演者自身の体験世界を、特殊な二重性として解き明かす）

①また舞に、といふことあり。「目を前に見て、心を後ろに置け」となり。これは以前申しつる舞智風体の用心なり。②見所より見る所の風姿は、わが離見なり。③しかれば、わが眼の見る所は、我見なり。離見の見にはあらず。④離見の見にて見る所は、すなはち見所同心の見なり。⑤その時は、わが姿を見得するなり。⑥わが姿を見得すれば、左右・前後を見るなり。⑦しかれども目前・左右までをば見れども、後姿をばいまだ知らぬか。後姿を覚えねば、姿の俗なるところをわきまへず。（『花鏡』第六条、88－89）

Ⅴ、無心と稽古－「観客を惹きつける意図」をめぐって

1、意図（作為・欲）が消えた時（無心の舞）、結果的には、最も観客を惹き込む。

2、世阿弥は「観客を惹き込む意図」を持たなかったのか。

・「花」の美学：　観客との駆け引き、「化かす」戦略（秘する、珍しき感、男時・女時）。

・「幽玄」の美学：　観客を惹く意図の放棄。観客に媚びない。

3、世阿弥は「花」と「幽玄」の緊張関係を生きた。

「欲」の放棄が目的なのではない。生身の「欲」との付き合い方。「欲」を生かす工夫。

4、稽古は「身心のゼロポイント」に戻るため。「欲」を濾過する。

「ゼロポイント」からそのつど新鮮に出発する。響き合う身体（即興性を可能にする身体）。

・「不測の事態に備える（備えない）」ということ